

梓外の少女



第一章 目覚め

「君！ 止まりなさい！！ ここから先に入ってはいかん！！」

「放せ……放してくれ！！ 妹が……俺の妹が！！」

警察官の制止を振り切り、ローブを掻い潜って現場に近付き、視覚的にも寒々しい印象を与えるブルーシートを剥ぎ取ると、青年——烏丸涼はその場にへたり込み、もう既に冷たくなった妹の頬を撫でながら号泣した。

「入沙……入沙あああああああつ！！」

衣服を全て剥ぎ取られた状態で地べたに横たわり、明らかに『暴行を受けた』結果、殺されてしまった……その無残な姿を晒したまま、入沙は、もう二度と光を宿す事の無いその瞳で、虚空を眺めたまま冷たくなっていたのだった。首筋に残された赤黒い跡が、彼女の最期を如実に語っていた。この時、彼女はまだ小学6年生。人生の幕を下ろすには、あまりにも早すぎた。

『ピピピピピピ・ピピピピピピ……』

彼の胸ポケットに入っていた携帯電話が頻りに彼をコールしていたが、そんな物に応答する気は到底起らず、半狂乱のまま警察官に取り押さえられ、無理矢理に入沙から引き離され、涼は絶叫した。

「放せ！ 放せよお！！ 入沙！！ 入沙あああああああつ！！」

12年前、入沙を身ごもった彼らの母親と、まだ小学生だった涼を残して、彼らの父親は航空機事故で大空に散った。そして母親も、心労からか、入沙を出産した後にすぐ、夫を追うようにしてこの世を去った。親戚も無く、身を寄せる宛ても無い二人は、孤児院に收容されて幼少期を過ごした。が、涼が高校生になった時、彼は死に物狂いでアルバイトに励み、生活費を蓄え始めた。そして大学生となった涼は、入沙と共に孤児院を出て自活を始めた。それからは、なるべく良い会社に就職して、入沙に不自由な思いをさせないようにするため、必死になって頑張ってきた。だが今、彼はその妹——入沙すらも失い、天涯孤独になってしまったのである。

以来、持ち前の明るさも影を潜め、学校でもアルバイト先でも精彩を欠いた涼は、次第に生気を失って、まさに『生ける屍』と化していたのである。

「おーい涼……やれやれ、今日もダンマリかよ。あれから半月だぞ？」

「ほっといて下さいよ。俺にとっては、たった一人の肉親だったんですよ？ それを、あんな無残な姿に……」

「犯人はまだ捕まってないし、証拠も手掛かりも無いと来たもんだ。やれやれだな」

薄汚れた白衣に身を包み、ボサボサのままの頭をボリボリと掻き、フケをポロポロと落とす無精髭の男が涼の傍にやって来て、呆れ顔になった。

「……それより、紘也さん。風呂に入ったのっていつですか？ 既に『臭い』ってレベルを超えてるんですが」

「あーん？ 垢じゃ死なねえよ」

紘也と呼ばれたこの男。極度のものぐさな上、研究に没頭し始めると寝食を忘れて熱中してしまう為、2～3週間入浴をしないなんて事はザラだった。元の容姿は決して悪く無いだけに、その辺りで非常に損をしていた。が、本人はそんな事はお構いなし、という感じであった。因みに、研究に没頭するあまりに単位そのものは落としまくっている為、既に24歳、現在大学6年生なのである。

「涼よお、メシ食ってるか？ 顔色悪いし、何だか頬もこけて来てるぞ？」

「ああ、食ってますよ。ゼリー食とかパンとか」

「あの量のバイトこなしてて、それっぽっちじゃ、お前もくたばっちまうぞ？」

「だから、ほっといて下さいよ！！」

涼はキッと紘也の方を睨み、怒声を発した。だが、直ぐにハッと目を伏せ、ポツリと呟いた。

「……スママセン。ちょっと、頭冷やしてきます」

(妹、ねえ……確かに可愛い娘だったが、奴があんなに落ち込むとはなあ。やって出来ない事は無いが、吉と出るか凶と出るか、博打だな。だが……ま、やってみるか！)

と、ポソッと呟いた後、彼もまた講堂から姿を消した。そしてその後、2ヶ月ほど紘也はラボに籠りきりになり、皆の前に姿を見せなかった。

月日は流れ、蒸し暑い風が肌に纏わり付く季節、6月のある日。涼の背後から、普段より数段キツめの異臭が漂ってきた。

「この匂い……紘也さん!？」

「おいおい、匂いで判断すんなよな。まあ、正解だが」

涼が振り向くと、そこには見事に伸びた髪と髭で不潔感を増した紘也が、既に茶色く変色した白衣に身を包んで立っていた。

「……ごうやざん……ちょっとその匂い、ぎぶずぎばずよ」

「あ？ ああ。オマエに、見せたいものがあるな。それを見せたら風呂浴びてくるよ」

鼻をつまみながら、涼はやっとの事で紘也と会話をした。それほどまでに、紘也の放つ異臭は凄まじかったのだ。

「……でぎれば、ぞどばえに風呂に行っでください……吐き気すらしてきばずよ」

「あー？ ちえっ、しょうがねえな……分かったよ。じゃ、2号棟4階の、第3ラボで待ってな」

そう言ってクルリと振り向き、ポリポリと頭を搔いてフケを落としながら、紘也はグラウンド脇にある運動部のクラブハウスへと向かった。そこでシャワーを借りるつもりなのだろう。その後姿を目で追いながら、涼は紘也の台詞を反芻していた。

「2号棟4階……第3ラボ？ 確かあそこは……」

その研究室は、ほぼ紘也の専用研究室と言っているほど、彼の好き勝手になっている部屋であった。元は研究員が沢山居たのだが、紘也の熱心すぎる研究の内容に誰もついていく事が出来ず、一人、二人と出入りする者が居なくなり、ついには彼一人になってしまったのである。だが、研究に没頭すると周りが見えなくなる紘也にはそんな事は一切関係なく……むしろ彼にとっては好都合な状況となっていたのである。

「そうだ、あそこは確か、ロボット工学の研究所だったよな。紘也さん、何を見せてくれるつもりなんだろう？」

首を傾げながらも、涼は紘也の指示通りの場所へと足を運んだ。が、鍵が掛かっている為に中に入る事はできない。仕方なくドアの前にしゃがみ込んで、紘也が帰ってくるのを待つ事にした。

「おー、わりいわりい」

20分ほど待たされたらどうか。涼が退屈を覚えてきた頃になって、やっとな紘也が姿を現した。ボサボサに伸びた髪はそのままであったが、流石に髭は鬱陶しかったのか、キレイに剃られていた。

「紘也さん、せっかく髭剃ったんだから髪も何とかしましょうよ」

「あ？ ……ったく、注文が多いな。ホレ、これでいいか？」

と、彼はポケットに入っていた輪ゴムで、無造作に掴んだ髪を首の後ろで縛った。そして、身体がキレイになった分、衣服の匂いが気になるようになったのか……研究室に持ち込んでいた替えの衣服に着替え、白衣も洗濯済みの予備に取り替えた。

「待たせたな。じゃ、この2ヶ月の成果を見せてやるよ」

「……その成果とやりに、俺が関係あるんですか？」

妹との死別をまだ引き摺っているのか、涼の態度は非常にトゲトゲしていた。が、そんな態度も何処吹く風という感じで、紘也はマイペースを保っていた。そして涼を隣室に招き入れると、白いシートの掛けられたベッドを指差しながら、涼にそのシートをはがすように促した。

「まあ、見てみるよ。かなりの自信作だぜ」

「……？ 何なんです？ 一体」

そう言いながら、涼はベッドの上に掛けられたシートをパッと剥ぎ取った。そして、次の瞬間。彼の視線はベッドの上に横たわる『それ』を見て……シートを握る手に力が籠り、ワナワナと震え始めた。

「どうだ？ 見事な造形だろう。寸分の狂いもなく再現したつもりだぞ？ これでも観察眼には自信があつてな」

誇らしげに胸を張り、紘也は『それ』の出来栄を自慢した。だが涼は喜ぶどころか、逆にその目に怒りを湛えて『それ』を凝視していた。

「……紘也さん。これは一体、何の冗談です？」

「冗談？ 友人としての、心を込めたプレゼントだぞ？」

「ふざけるな！！ 悪ふざけにも程がある……これは俺と、入沙に対する侮辱じゃないか！！」

涼は、怒りに満ちたその目を今度は紘也に向け、ベッドに横たえられた『それ』を指差し、激高した。それもそのはず。『それ』は、髪の色こそ銀色に変わっていたが、その姿はまさに、彼の妹——入沙そのものだったのだから。

「あーあ、『凶』と出たかあ。良かれと思ってやった事なんだがなあ」

「何！？ じゃ、アンタは俺をからかう為にだけ、2ヶ月もここに籠って……この人形をこさえてたってのか！？」

すっかり興奮しきってしまった涼を宥めながら、紘也は台詞を続けた。

「落ち着けよ。良かれと思って、って言っただろ？ 少なくとも悪意は無いんだ……よっ、と」

紘也は、入沙そっくりのその体を抱き起こすようにして姿勢を変え、ベッドに座らせた。

「じゃあ、一体なんだって言うんです！？ こんな人形を俺に見せて！」

「涼、俺の専門は何だったか知ってるだろ？」

「専門？ いつも、そこの机でフィギュア造ってるだけじゃないですか」

流石の紘也も、その台詞にはガックリきたようだ。トホホと笑って、机の方に目をやりながら答えた。

「アレはただの趣味さ。なんで俺がわざと単位を落としてまで、大学に居続けたらと思ってる？ 俺はこういう研究を続けたくて、ずっと居座り続けているのさ。卒業しちまったら、勝手気ままにこんな事は出来ないからな」

「研究？ それ、等身大フィギュアじゃないんですか！？」

その台詞を聞いて、紘也はニヤッと笑い、涼を自分の隣に来よう手招きした。そして……

「いいか涼、コイツは最初に起動させた者を、主人として認識するように造ってある。専門的に言うと生体認証システムだ。ホレ、銀行のキャッシュカードなんかに使われてんだろ？ 平たく言うとアレの発展形さ」

「……！？」

紘也は誇らしげに説明をした。だが涼は、ワケがわからんという感じで首を傾げながら『入沙フィギュア』をシゲシゲと眺めていた。然もありません、裸体にシャツを羽織っただけの『それ』は、まさに紘也の趣味の集大成にしか見えなかったからだ。

「俺が操作しちまっちゃ、意味がねえんだ。いいか？ 両肩の後ろに、一箇所だけ柔らかく、指が押し込める場所がある。そこを探ってみな？ シャツの上からじゃないぞ、直にだぞ……ああ、まだ指は押し込むなよ」

「え……肩の後ろ？ ああ、ここだけ柔らかいな」

と、涼は『入沙フィギュア』の両肩に正面から手を置く姿勢になった。その姿を見て、紘也が思わずブツと吹き出した。

「その格好、セクハラ兄ちゃんみたいだな」

「なっ、アンタの指示でしょうが！！」

真っ赤になりながら、涼は笑いを堪えている紘也に食って掛かった。

「ブクク……悪い悪い。じゃ、その場所を、両方一編に強く押しながら、そいつに向かって何か声を掛けてみな？」

「え？ 押しながら……声を？」

何が何だか分からなかったが、涼は紘也の指示通りに『彼女』の顔をじっと見詰めながら、優しく呼び掛けた。

「入沙……イリサ！！」

……と、その瞬間。彼女の目がゆっくりと開き、その眼で涼の瞳を見詰め返してきた。

「……なっ！？」

「指紋・声紋・網膜パターン登録完了……貴方は誰ですか？ 名前を教えてください……」

『彼女』に話し掛けられ、涼は驚いた。だが、生前の入沙にソックリなその声を聞いて、彼はほぼ無意識に答えていた。

「からすま りょう」

「カラスマ・リョウ……パスワード登録・認証完了、ブートアップ」

『彼女』はその第一声を発すると、それまで人形のような目元に、まるで人間の瞳のような輝きが宿った。その様子を見て、紘也は『よしっ!』とガッツポーズをして喜んだ。だが、涼はまだ、狐に摘まれたような顔をしていた。

「紘也さん……こりゃ、どういう事です!? 髪と瞳の色以外は、入沙そのものじゃないですか!!」

つぶらな瞳で涼の顔をジッと見詰めている『イリサ』の頭を優しく撫でながら、紘也が説明を始めた。

「ハハハ。コイツは、俺が高校生の頃からずっと研究を続けて来た、極めて人間に近いロボット、アンドロイドだよ。本当は、もっと別な造形にするつもりだったんだがな。ボディの形成に入る前に、お前がゾンビみたいになっちゃったからな」

そう前置きすると、紘也は指を咥えながら自分の方を観察し始めた『イリサ』に手を振りながら、更に説明を続けた。

「オマエの妹の、入沙ちゃんに似せてボディを形成してみたんだ。慰めになるか怒りを買うか、二つに一つの大博打だったが……満更でもなさそうだなあ? ん? 怒鳴られた時はヒヤヒヤしたが」

ポーっとした顔で、思わず『イリサ』の姿に見惚れていた涼の顔を覗き込んで、紘也はニヤリと笑いながら感想を求めた。

「……っ!! ひ、卑怯ですよ!! 姿かたちだけならまだしも、声や仕草までそっくりに造られちゃ、怒れないじゃないですか!!」

「フッ……俺の勝ちだな」

紘也は訳の分からない優越感に浸っていた。だが、つい先刻、凄まじい剣幕で紘也を怒鳴りつけてしまった涼としては、今、非常にバツが悪かった。これが本当に単なる等身大フィギュアだったら、金輪際、紘也とは縁を切ってやろうと、そこまで考えてしまった為、詫びを入れたいのだが……この勝ち誇ったような彼の態度を見ると、素直に謝れないのだった。

「さっきの説明だと、この子は俺の事を主人として認識する……って事ですよね?」

先程の態度を誤魔化すかのように、涼は熱心に『イリサ』についての質問を始めた。その言葉を聞いて、エンジニア魂に火がついたのか。待ってました! とばかりに紘也が説明の続きを始めた。

「そう、彼女は今、オマエの事を『主人』として認識しているはずだ。しかし、最初の一声が『イリサあ〜』とはねえ」

「なっ……俺はそんな、ヤラシイ声じゃありませんよっ!!」

自分の声色を真似て演技をする紘也に、涼はまたも真っ赤になって抗議した。

「ハハ、冗談だ。さっきの初回起動で、お前の生体認証も同時に完了してな。この子の『マスター』として登録される仕組みになってるんだ」

「この子の……『マスター』? 俺が!？」

涼は未だに『信じられない』というような表情で、自分の方を監察しているイリサの顔を見詰めた。

「だから、スイッチを切る事は誰にでも出来るが、再起動できるのは、涼。お前しか居ないんだ」

イリサは涼の手を握って、興味深そうに眺めていた。その姿を見ながら未だに驚きを隠せないでいる涼が、今度は逆にイリサの髪の毛を優しく撫でながら、自分の方に振り向かせた。

「リョウ……?」

「そうだ、リョウだ。お前の兄ちゃんだよ。お前はイリサ……イリサだ!」

「イリサ……イリサ……私の……なまえ? イリサなの?」

「そうだ、イリサだ! 俺の妹だ!!」

その様子を見て、紘也はウンウンと頷いていた。



「その調子だ涼。その子は、まだ言葉を覚え始めた子供と同じだ。純粋無垢な子供なんだよ。だから、そうやって一つずつ、知識を付けさせて行くんだよ」

「へえ……あはは、イリサ。痛いよ。あんまり強く指を握っちゃダメだ。もっと優しく……」

「やさしく……？」

と、次の瞬間、イリサは思い切り涼の手を握り返してきた。

「いててててて！！ い、イリサ！ 痛い、痛いよ！」

「いたい……？」

こりゃヤバイという感じで、慌てて紘也がイリサの手を涼の指から引き剥がした。

「スマン。外見は華奢だが、この子はアンドロイドだからな。基本的な身体能力は、並の人間の3倍近くはあるんだ」

「さ、先に言って下さいよ！ 折れるかと思った……ん？」

痛がる涼を、イリサは不思議そうな目で見ていた。彼女は『痛い』という感覚を知り得ないので、こればかりは『禁止事項』として教え込むしかないようだ。

「いいかいイリサ。今のは『やさしい』じゃなくて、『らんぼう』って言うんだよ。やってはいけない事なんだ」

「らんぼう……やっちゃ……ダメ？」

「そう。やさしいって言うのはね、こうやって……ホラ、真似してごらん？ そう、そう……」

そう言って涼は、ポケットティッシュを取り出し、まず自分で柔らかく握って見せたあと、イリサに真似させてみた。握り潰さないように弱めの力を加える。この感覚を覚えさせるには、実際に体感させるしかない、と、咄嗟にそう判断したのである。

「ほー、教え方が上手いな涼」

「実際にやってきた事ですだからね。入沙が赤ん坊だった頃の事を思い出しますよ」

歳の離れた兄妹だった為、涼はオムツの取替えからずっと入沙の世話をしてきた。彼は今、その頃の事を思い浮かべながら……目の前にいるイリサに優しい視線を向けていた。が、ふと思い出したように、ある疑問を紘也に投げかけた。

「えーと、アンドロイドですよ？ この子。動力と燃料は？」

「ん。動力源はモーターだ。つまり電力で動いている。だが、電源は電池じゃないんだ」

「え？」

頭に疑問符を浮かべながら、涼はティッシュで遊んでいるイリサをジッと見詰めた。

「この子は、体内に特殊なエネルギーコンバーターを搭載しててな。ぶっちゃけて言うと、口からメシを食うんだ」

「メシ……って、俺達が食ってる、あのメシですか？」

「そう。米の飯だ。それを体内に取り込んで、コンバーターに導入すると……ん〜、専門的な説明はやめよう」

「……助かります。俺、文系なんで」

この段階で既に脂汗を流し始めた涼を見て、紘也は苦笑いしながら説明を中断し、分かりやすい言葉に置き換えて補足した。「要するに、飯を燃料にして電力を作って、それで動いてるんだ。燃料補給の頻度は……ま、お前と一緒にメシ食ってれば間違いないよ。だが、2〜3日程度なら、省電力モードで無補給でも稼働できる」

「妙にリアルですね、ホントに人間みたいだ……ん？ ちょっと待って下さいよ？ 飯を食うって事は、つまり……」

食べる事と相反するメカニズムが、涼の頭に思い浮かんだ。が、紘也はカラカラと笑いながら、更に説明を加えた。

「この子がトイレを必要とするのは、排水作業の時だけ。電力を発生させる段階で、どうしても余剰な水が出来ちまうんだ。だからまあ、ここも人間と一緒に……って、何赤くなってんだよ？」

「……何でもないです」

不覚にも涼は、イリサがトイレで『排水』するシーンを思い浮かべてしまった。その事を悟られまいと、必死に表情を作っていたが、紘也にはお見通しだったようだ。

「教えるのが恥ずかしかったら、そこは俺が替わってもいいぞ？」

「結構ですっ！！ ったく……この子はもう、俺の妹なんでしょ？」

「アハハハ、正しい反応だよ涼。誰だって、妹の恥ずかしい格好は見せたくないもんな？」

「……っ！！」

見透かされた恥ずかしさか、はたまた『妹のその姿』を想像したからか。涼の顔は赤いままだった。

「……っと、実際に妹を育ててきたお前には、メカニズム以外の説明は不要だな。ま、困った事があったら、その都度教えるよ」

「助かります……そ、それと……」

「ん？」

「……さっきは、スンマセンした。紘也さん……『妹』を甦らせてくれて、ありがとうございます」

急に改まった態度になった涼を見て、紘也はポリポリと頭を掻きながら背を向けた。

「いいって事よ。その子はお前にくれてやる。が、その代わり。俺の研究の集大成だ、大事に扱えよ」

背を向けたままで、紘也はぶっきらぼうに言い放った。恐らく、これが彼なりの照れ方なのだろう。

「……分かりました」

今度は、ティッシュを一枚ずつ取り出して、フワフワと飛ばしてそれを眺めているイリサを見詰めながら、涼は紘也に礼を言った。

「じゃ、いつまでもその格好じゃあ可哀想だからな。キチンと服を着せてやらないと」

「服、ったって……そんな物が何処に？」

と、涼が頭に疑問符を浮かべている間に、紘也は既にイリサが纏っていたワイシャツを脱がせに掛かっていた。

「なっ……！ いきなり、何すんですか！？」

「あー？ コレを脱がさなきゃ着替えが出来ないだろうが」

まるでマネキンを扱うかのように、アッサリとイリサの着衣を取って行く紘也を見て、涼は思わず赤面しながら呟いていた。

「表情一つ変えず、良くそんな真似が出来ますね？」

「オマエなあ、幾ら精巧に出来ていたってコイツはアンドロイドなんだぞ。増してや俺はその制作者なんだ、その俺がいちいちメンテの度に照れてたら、話にならんだろうが」

それはそうだが……と、涼はイリサの裸身を正視できないままその場に立ち尽くしていた。が、そんな彼を見て、紘也が呆れたように言い放った。

「涼、この子は未だ生まれたばかりの赤ん坊だと言った筈だろ？ だから、外に出る時は服を着るとか、腹が減ったら飯を食うとか、そんな事もまだ知らないんだぜ。それを教えてやるのは涼、オマエの役目なんだぞ」

「……！！ そ、そうですよね。俺がこの子を育てていくんですよ」

紘也は、グッと握り拳を見詰めている涼に向かって苦笑いを浮かべた。そしてロッカーから女兒用の衣服一式を取り出すと、それを涼に手渡し、『最初の仕事だ』と言いながらその肩を叩いた。

「……メチャクチャ精密に出来てますね？ まるで本物の肌のようなだ」

「当たり前だ、パッと見でアンドロイドだとバレちゃったら大騒ぎになるだろうが」

その造形の美しさに暫し見惚れていた涼がハッと我に返ったのは、5分後の事であった。彼は慌てて下着から何から、全てを自らの手で彼女に着せてやる事になったのだが、全てが終了した時には全身汗だくであったという。

第二章 入沙とイリサ

「いらっしゃいませ。空いてるお席どうぞー」

とある金曜日の深夜11時半を過ぎた頃、バイト先の牛井屋で、涼は入って来た客にカウンター席へ座るよう促した。席に着いた客は、牛井の大盛りと生卵を注文し、備え付けの麦茶をコップに注ぎながら涼に話し掛けて来た。

「おい、烏丸」

「お待ちせしました、牛井大盛りと卵です。ごゆっくりどうぞ」

客が自分を名指しで呼んでいた。が、涼はそれに対する返答はせず、オーダーされたメニューをカウンターに届けると、パイと背を向けて仕事に戻っていった。

「何だよ、俺は客だぞ。もっと愛想良くしろよな」

(非常識な奴だな。仕事なんだよ、こっちは)

厨房にいる社員がこちらを睨んでいるという事を小声で知らせ、涼はその客の方には振り向かず、紅生姜の少なくなった容器をチェックしていた。

「融通の利かん奴。他に客なんか居ないじゃないか」

(TPOってモンが無えのかよ！)

「……しょうがねえ。上がりの時間まで待っててやらあ」

つまらなそうに、牛井をかき込む客——戸塚浩司。彼は涼と同じ大学に通う、文学部の3年生。つまり同級生である。成績も良く外面も良かったが、とにかく彼には『見知った人物に対する遠慮』というものが決定的に欠如していた。講義中に話し掛けて来るなど序の口。休日など、自分が暇であれば、相手の都合などお構いなしに突然来訪し、日がな一日だべった挙句に冷蔵庫の中まで勝手に漁り、無許可で食料を取り出して食べてしまうような有様なのである。

そして、時計の針が12時を指し、日が変わったその瞬間。涼のバイトの時間も終わりを告げた。

「おい烏丸、終わりだろ？ 早く行こうぜ」

(……このままの格好で帰れるか馬鹿！)

本当にウンザリ……という感じに吐き捨て、涼はバックヤードに消えた。彼は戸塚の存在を心底迷惑に思っており、露骨に敵意を剥き出しにしていたのだが、何故か戸塚は涼に付きまとい続け、こうしてバイト先にまで押しかける始末なのだ。

(まずいな。こないだまでならともかく、今は……)

更衣室で涼は、アパートに着くまでにどうやったら戸塚を振り切れるか、その事を考えていた。何せ彼の家には、先日、絃也からプレゼントしてもらったばかりのイリサを、スイッチを切った状態で寝かせてあるのだ。なぜスイッチを切っているか……それは説明するまでも無いだろう。まだ何も知らない彼女を放置する訳には行かないし、あちこちに連れ歩く訳にも行かない。留守番をさせるには、もう少し教育を施す必要があったのだ。

(あの野郎、元々相性悪かったけど……あの時のコールとその後の対応で、印象最悪になったんだよなあ)

そう。入沙が殺害されたあの日、涼の携帯電話に執拗なコールをして来ていたのはこの男、戸塚だった。彼の用件は涼を遊びに誘う事であり、電話に出ない事に逆ギレして見せ、涼を激怒させていたのだった。

(ふう……今、そんな事を思い出しても仕方ないな。これから出掛ける用事があるとか適当に理由をつけて、駅で追い返そう)

そう結論付け、涼は制服を脱いで私服に着替え、裏口から外に出て、そこで待っている戸塚と合流した。

「遅いぞ烏丸、着替えに何分掛かってんだよ。俺を退屈で殺すつもりか？」

「待ってるとは言わなかったぞ。それに俺は、これから知り合いの処に行くんだ。アパートには行かないぜ？」

「何だと？ じゃあ何か？ お前はまた俺に、マンガ喫茶に泊まれとでも言うのか？」

「知るかよ……っていうか、おとなしく家で寝てろよ。俺にだって都合はあるんだぞ？ 毎回来られる方の身にもなれってんだよ」

身勝手極まりない戸塚の言い分に、涼はまたも深い溜息を吐いた。しかし、当の彼はその隣を歩きながら、ブツブツと文句を言っている。よほど何もしないで寝ているのが嫌なのか、とにかく一人暮らしのアパートに帰る事を嫌がるのだ。と言って、日本アルプスを隔てた向こう側にある彼の実家から大学まで通うことは、不可能に近いだろうが。

「そうだ烏丸、ルームシェアしようぜ。それなら退屈しないで済む」

「寝言は寝て言え。ほれ、俺はここまでだ。大人しく自分のアパートに帰れ」

「ちえっ、マジで出掛けんのかよ。あーあ、仕方ねえ。何を当たるか」

「いい加減、人様に迷惑掛けてる事に気付けよな。じゃあな」

そう言って涼は、地下鉄の駅入口を駆け下りて身を隠した。そして、戸塚の姿がそこから消えたのを確認した後、やれやれ……といった感じで自宅に向かい始めた。あそこまであからさまに文句を言われて、それで凹まない奴も珍しい。一度、頭の中を覗いてみたいものだと思い、むしろその行動パターンに、ある意味感心してさえ居た。そして自宅近くのコンビニでビールとつまみを買って、アパートの前に差し掛かったその時。彼の目は、ありえないものを捉えていた。

（……ん？ ドアの前に誰か居る……まさか！？）

その『まさか』だった。涼のアパートのドアの前でウロウロする人影……それは戸塚だった。片手に酎ハイの缶を持ち、その足元にも既に2～3本分の空き缶が転がっていた。

（何て奴だ！ あの空き缶、片付けるの誰だと……いや、そうじゃない！ あんの、馬鹿！！）

すっかり頭に血が上った涼は、自分が今まで身を隠していた事も忘れ、フラフラとドアの前をうろつく戸塚の脳天に自らの拳骨をぶつけていた。

「このバカヤロウ！！ 人んちの前で何酔いどれてんだ！！」

「いつつ……ああ？ ほれ見ろ、やっぱ帰ってきたじゃねえか」

「……！！ 忘れ物を取りに来ただけさ！ それより戸塚、どうしてお前は俺に付きまとうんだよ！！」

すっかり虚ろな目になっていた戸塚を、涼は正面から怒鳴りつけた。だが、近所の家の明かりが一つ、また一つ灯り、自分達の発する喧騒が迷惑になっている事に気付いた彼は、慌てて戸塚を連れて自宅のドアの奥に引っ込んだ。

「……ったく。どこまで俺に迷惑かけりゃ気が済むんだよ、お前は！！」

「迷惑？ そんなもん掛けた覚えはねえよ。俺はただ、友達の家遊びに来てるだけだぜ」

「相手の都合を無視すりゃ、充分迷惑になるんだ！！ いい齢こいて、そんな事も分かんねえのか！！」

隣室に声が洩れるのを恐れ、涼は小声で怒鳴った。しかし、ただでさえ常識が欠如した戸塚に酔いがプラスされ、更に手が付けられない状況になっていたのもはや説教するだけ無駄だった。とにかく居つかれては迷惑と、涼は身支度を整える演技をして、今度こそ戸塚を外に放り出そうとした。だが……

「……ん？ おい鳥丸、あすこに寝てんの、誰だあ？」

「……！！」

まずい！！ と、気付いた時にはもう遅かった。戸塚は、ドアの向こうにある布団に寝かされているイリサの姿を見つけ、ずかずかとそちらに向かって歩き出していた。

「おい、いい加減にしろよ！！ なに勝手に上がってんだ！！ 通報すんぞ、この野郎！！」

「あれえ？ こ、コレ……お前の妹じゃねえか？ けど……髪の色が違うし、息してねえ？」

涼の怒鳴り声などすっかり無視して、戸塚はイリサの顔を覗き込んだ。その顔を見た瞬間、何か彼が驚いた……というか、怯えたような表情を見せたが、彼女が『人間で無い』事を見破ると、すぐにまたニヤケた表情に戻っていた。そして、あろう事か戸塚は、イリサの存在を嘲笑するかのようには高笑いしていた。

「ブッ……ははははは！！ お前、妹ソックリな人形作ったのかよ！！ シスコンのお前にゃ似合いだぜ、あははははは！！」

「……！！」

彼の口から出た台詞で、涼の頭の中で何かが切れた。そして次の瞬間、戸塚の横面に涼の渾身の右ストレートが炸裂した。よろけた処で今度は胸ぐらを掴まれ、彼はドアの外へと放り出された。

「な、何すんだよ、この暴力野郎！！」

「ウルセエ……顔の形をこれ以上変えられたくなかったら、そのまま失せろ！！ そして二度とここに来るな！！ じゃねえと、マジで警察呼ぶぞ！！」

「……チッ」

予想を遥かに越える剣幕に、流石の戸塚もまずいと思ったのか。スゴスゴと逃げるように去って行った。だが、涼の心中は穏やかではなかった。

「シスコンだ！？ この手で育ててきた妹が、可愛くない訳ないだろうが！！ ロリコンのテメエとは違うんだよ、馬鹿野郎！！」

戸塚を殴り倒した右拳を見詰めながら、涼は肩を震わせた。そしてドアの奥に姿を消し、ゆっくりとイリサを目覚めさせた。

「……リョウ……お兄ちゃん？」

「ただいま、イリサ」

「……？ お兄ちゃん、どうしたの？ 目からお水がこぼれてるよ？」

「ん……何でもない。何でもないんだよ、イリサ」

不思議そうに涼の頬を伝う涙を指で拭い、イリサは円らな瞳で彼を見詰めていた。その姿に生前の妹の姿を重ねて見てしまったのか、彼は暫く彼女の身体を抱き寄せながら、嗚咽を漏らしていた。

翌朝。涼は自分の腕に掛かる重さを感じて目が覚めた。ふと時計を見ると、時刻は午前10時。すっかり寝坊をしてしまったようだ。

「……？ 寝ちまったのか……ん!？」

ハッと気づくと、寢息を立てるでもなく、寝間着の代わりにTシャツを着けただけの姿ですぐ隣に横になり、ジッと自分の顔を見詰め続けているイリサの顔が目に入った。涼は驚き、思わず後ろに飛びのいてしまった。

「……お兄ちゃん、やっと目が開いた。ずっとお目つぶってて、動かなかったね」

「い、イリサ……ずっとそこで見てたのか？」

「お兄ちゃん、イリサを抱き締めたまま、動かなくなっちゃった。だからイリサ、ずっと横にいたの」

そうか、あれから自分は、あのままの格好で眠ってしまったのか……と思ひ浮かべ、涼は思わず赤面してしまった。しかしそれ以上に、Tシャツ一枚で下には何も着けていないイリサが、自分のすぐ横で寝顔をジッと見ていた事の方が、恥ずかしかったのかも知れない。

(もしかして、イリサには休眠モードが無いのか？ その辺、紘也さんに聞いておかないとな)

後で連絡しておこう……そう考えた涼は、顔を洗って寝ぼけた頭をスッキリとさせた後、とりあえず何か腹に入れようと冷蔵庫を開けた。そして多めに炊いて冷凍保存しておいたご飯を電子レンジに入れ、解凍を始めた。おかずの用意が無かったが、イリサが口に出来る物としては、今のところ米の飯しか知らない為、ちょうど良かった。

「しかし、毎日これじゃ、あまりに殺風景な食卓になってしまうな。飯の他に、エネルギー化できる食品が無いかどうか聞いておかなきゃ……おーいイリサ、朝ごはんを食べよう」

「朝……ごはん？」

初めて聞く言葉に、イリサはキョトンとした顔になった。

「そう、ごはん。朝ごはんだ。ごはんを食べないと、動けなくなってしまうんだよ」

「動けなくなる……ダメ。イリサ、ごはん食べる」

イリサはそう言って涼の前に座り、差し出された茶碗とスプーンを持って……その先をどうやって良いか分からず、動きが止まった。

「ほら、お兄ちゃんの真似をしてみて。こうやって、スプーンでごはんをすくって口に入れるんだ。そしたら、良く噛んでゴックンしてごらん？」

涼がまず、自分の茶碗からご飯をスプーンですくい、自分で食べて見せた。それを真似して、イリサも同じ動作を繰り返した。自分で口に物を入れるのは初めてのようだったが、咀嚼して飲み込むという基本動作は最初からプログラムされていたらしく、問題なく実行する事が出来た。

「よし、上手だ。その調子で、そのごはんを全部食べてごらん？」

「うん」

涼の言う通りに、イリサは自分の分のご飯をゆっくりと口に運び、平らげていった。その動きはぎこちなく、まさに初めて自分でスプーンを握った子供のそれに良く似ていたが。それでも、一口ごとに動きが滑らかになっていき、上手になっていった。一度体験した動きは逐次誤差修正され、知識として蓄積されていくようだ。その辺の作り込みは見事としか言いようが無かった。(へえ、大したもんだ。一度教えただけなのに、もうあんなに上手に……今度は箸の持ち方も教えてやろう)

そんな事を考えながら、涼は味噌汁に手を伸ばそうとした。と、その時。イリサの動きに気を取られ、お碗を掴み損ねてしま

った。ひっくり返ったお椀からこぼれた味噌汁はイリサの方へと流れていき、彼女の着ていたTシャツを汚してしまっていた。

「あ……ゴメン、イリサ！ 熱くなかったか！？」

「……？ あつい？」

あ……そうか。痛覚が無いのだから、熱さ感じないか……と、涼はホッと胸を撫で下ろした。あまりに精巧に造られている為、彼女がアンドロイドであるという事を忘れてしまっていたのだ。だが、熱くなければ良いというものでは無い。

「イリサ、汚れた服を取り替えるよ。それを脱いで」

「うん」

イリサは躊躇無く、汚れたTシャツを脱いだ。その様子を見た涼は、思わず目を背けてしまった。無理からぬ事だろう、彼女の身体は第二次性徴を迎えたばかりの、生前の入沙を模して造られているのだから。

(こ、これはマズった。入沙が目の前で着替えているのと同じだよ、迂闊だったなあ)

イリサの存在により、涼は心に負った傷を癒せるかも知れないと考えていた。が、同時に彼は、とてつもなく大きな壁が眼前に迫っている事を改めて実感し、強烈な焦燥感に駆られていた。

「脱いだ」

「あ……うん。そしたら、その服をよこしなさい。新しいのと取り替えるからね」

涼は、なるべくイリサの身体を見ないようにと、微妙に目線を逸らしながらTシャツを受け取った。だが、その様子を見たイリサが、またもキョトンとした顔になり、涼に尋ねた。

「お兄ちゃん、顔が赤い……どうしたの？」

「……！！ 何でもない、何でもないよ。今、服を取ってくるからね。待ってるんだよ」

君の裸を見て、恥ずかしくなったんだ……そんな事を言えるはずもなく、涼は慌てて絨也から貰ったイリサ用の服を、物干しまで取りに席を立った。一度着ただけだし、イリサの体からは汗も垢も出ないので、洗濯の必要など全くなかったのだが。その辺は涼の几帳面な性格の為せる業だろう。

(ふう。あそこまで生前の入沙にソックリだと、ああいうシーンに出くわした時に困るよなあ。だが……参った。そんな事、どうやって教えればいいんだ)

イリサの下着を両手で摘んで眺めながら、またも涼は赤面してしまった。それは、彼女が実の妹にソックリだからという事だけが原因ではなかった。彼は、極度の女性恐怖症だったのだ。無論、普通に『知人』『友人』として交際する場合には問題は無い。だが、恋愛感情や性的な事情が背景につくと、どうしてもダメなのであった。つまり、女性の裸を見るという段階から、既にアウトなのである。

(……あの子は、見た目は入沙そのものだ……しかし、中身は赤ん坊と同じなんだ。だから、ゼロから教育しなくちゃダメなんだ。恥ずかしがってる場合じゃない！)

と、未だに真っ赤なままの両頬をピシッと叩いて気合を入れ、涼はイリサの居る方へと戻っていった。だが……

「イリサ……あ、あれ？ イリサ！？」

居ない。つい、今さっきまでそこに居たはずのイリサが居ないのだ。涼は一瞬パニックになり、慌てて周りを見渡した。すると……さっきまで閉じていたはずの玄関ドアが開いていた。

「……って、まさか！？」

今の今まで真っ赤だった涼の顔から急に血の気が引き、真っ青になった。そしてその頃、玄関の外では……彼の予想を遥かに越える『事件』が起こっていたのである。

「ちょっ……貴女、何で裸なんですの！？」

「お兄ちゃんが、脱ぎなさいって言ったの」

素裸で玄関の外まで出てしまったイリサの前に、一人の少女が立っていた。彼女が偶然、涼の家の前を通り掛かった時に、いきなりドアから素裸の女の子が飛び出てきたのだ。その姿を見て驚いた彼女は、女の子——イリサの行動を見咎めて、注意をして来たのである。

「冗談じゃないですわ、早くお家に入りなさい……って、聞いてますの！？」

少女の注意などまるで耳に入っていない、というか……別のものに興味を惹かれたイリサは『それ』に注目し、もっと良く見てみたいという好奇心に駆られ、凄まじいスピードで行動に出た。そして、次の瞬間。目の前に居た少女の衣服の胸の部分は、イリサによって勢い良く引き裂かれていた。そう、イリサが注目したもの。それは、目の前に立った少女の、恐らく平均を上回る大きさを誇るであろう、その胸だったのだ。

「え……っ!？」

何が起こったのか、理解できない……少女は一瞬、そんな感覚に身を支配され、呆然と立ち尽くしていた。

「……私と似てる。お兄ちゃんのは違う」

その見事に育った乳房と自分の胸を見比べながら、イリサがボソッと呟いた。そして、その呟きを聞いた少女は……

「……キャアアアアアアアアア!!」

当然というか。絹を裂くような叫び声を上げ、その場に蹲ってしまった。そして数秒遅れて、ドアの奥から涼が飛び出して来た。彼は、予想を遥かに越えた事態に一瞬気が遠くなったが、放置しておく訳に行かないその状況を打破する為、イリサと、その場に蹲る少女を連れて、再びドアの奥に消えた。

「ゴメンなさい! ウチの妹が、とんだ粗相を!」

とりあえず、露になった胸元を隠してもらうために自分の服を目の前の少女に着せて、涼は床に額をこすり付けて平謝りした。本人の仕出かした事では無いとはいえ、下手をすれば現行犯で逮捕されてしまうレベルの状況だったのである。詫びたところで、許してもらえない訳は無い。だが誠意は尽くそうと、彼は必死に謝っていた。

「……頭を上げてください。貴方が私を裸にした訳では無いでしょう」

そう言って、少女は涼を赦免した。まだ頬は赤いままだったが、どうやら落ち着きを取り戻していたようだった。

「本当にゴメンなさい。ウチの妹は、ちょっと特殊な……姿はあの通りだけど、中身は赤ん坊と同じなんです」

「特殊? 確かに、素裸で外に出てきたり……不思議な子ですけど」

やっとの事で衣服を身につけたイリサをチラリと見て、少女はあからさまに『不思議で済まされるレベルじゃ無いでしょう』と言いたげな視線を涼に向けた。

「実は俺、数ヶ月前に、実の妹を喪いまして。覚えてませんか? あの女兒暴行殺人事件。その被害者が、俺の妹なんですよ」

その説明を聞いて、あっ! と思い出したように、少女は目を丸くした。

「え!? じゃあ、あの……烏丸入沙ちゃんの、お兄さん!？」

「そうです。烏丸涼って言います」

入沙の訃報はニュースでも報じられ、未だに犯人も捕まっていない為か、話題に上る事が多く、知名度もそれなりに高いのだった。

「そういえば、似ている……けど、一体?」

亡くなったはずの入沙ちゃんが、何でここに? と、少女は首を捻った。それを見た涼は、こうなった以上は彼女にも真実を知らせる必要があるだろうと考え、腹を括ってイリサの素性を明かした。

「あそこに居る『イリサ』は、俺の通う大学の、ロボット工学研究所で造られたアンドロイドなんです。それもつい先日、完成したばかりなんです」

「あ……アンドロイド!? 彼女が!？」

ボンヤリと窓の外を眺めるイリサを見て、少女は更に目を丸くした。

「信じられない……行動は非常識だけど、彼女は人間そのものですわ。ロボットだなんて……」

「俺も未だに、嘘だろと思う事があるんですけどね。でも、あの子は……おーい、イリサ。こっちに来なさい」

呼び声に振り向き、イリサがポテポテと歩いて来た。涼はそんな彼女の両肩を正面から掴んで、スイッチを切ってみせた。と、イリサはスッと目を閉じ、カクンと膝を折ってその場に崩れ落ちた。涼はその身体を優しく抱きとめ、その場に寝かせた。

「触ってみて。彼女はもう、何の反応もしないから」

「……本当、なんですのね。嘘みたい、本物の人間みたいなのに……」

そして涼は、再び両肩のスイッチに手を掛け、イリサの名を呼んで再起動させた。と、イリサの目がゆっくりと開き、生体認証のシーケンスを音声で報じた後、瞳に光が点り、元の状態に戻った。

「お兄ちゃん……おはよう」

「おはようイリサ。さ、もういいよ。でも、もう黙って外に出たらダメだよ」

「うん、分かった……」

短いやり取りの後、イリサは再び窓の方へと戻って行き、空を飛ぶ鳥の姿を不思議そうに眺めていた。先程も、窓の外に見えた鳥の姿を追いかけて、思わず外に飛び出してしまったらしい。彼女はとにかく、好奇心のカタマリなのである。

「ね？ ご覧の通り。言葉もまだ片言だし、それに……常識や羞恥心も……まだ、ないんです。一般常識は教えられるけど、女の子としての知識は、俺には……」

「なるほど……だ、だから……」

そう言って、先程露にされた胸元に視線を落とし、少女は再び顔を赤らめた。その様子を見て、偶然視界に入ってしまった彼女の胸を思い出し、涼も真っ赤になってしまった。

「あ……」

「って、み、見てませんよ？ チラッとしか……あ、いや、その……」

『見てません』という誤魔化しが上手く出来ない、正直な性根を涼は今更ながらに恨めしく思った。だが、目の前の少女は、赤面してはいるが怒っている様子は無い。冷静に『先程の事は事故なんだ』と割り切ってくれたのだろうか。照れて俯き、上目遣いになって涼の方をチラチラと見ていた。

(……ま、参ったなあ。こういう雰囲気、苦手なんだけど……あ、そうだ！)

と、無理矢理に話題を切り替えるため、涼は咄嗟に全く違う話を切り出した。

「えーと、洋服を弁償させて欲しいんだけど、今は持ち合わせが無くて。後で送らせてもらうから、住所と名前、教えてくれるかな？」

「弁償なんて……構いませんわ。でも、何かして下さると言うのなら……あ！」

「え？」

少女はチラッとイリサの方に視線を移しながら、何かを涼に申し出ようとしたようだった。が、異変に気付いて、思わず声を上げていた。そして、その声に反応して、涼もイリサの方に視線を移した。

「……！？ イリサ、足元濡れてるじゃないか。どうしたんだ！？」

「え？ ……わからない。ここからお水が出たの」

そう。窓の外を向いたまま、彼女は下着と下肢、それに床をビッショリと濡らしていたのだった。そこで涼は、紘也の言っていた事を思い出した。

『トイレを必要とするのは、排水の時だけだよ』

……そうか、先程の食事でジェネレーターが働いて、余剰な水分が出来ちゃったんだ……と、冷静に分析して事が済めば苦労は無い。この事態は『おもらし』以外の何物でもないのだから。

「イリサ〜、お水が出てくるとき、何も感じなかった？」

「お水が出るよ、っていう合図はあった」

どうやら、満水を知らせるセンサーは付いているらしい。けど、それを感知した時に、どういう行動に出たらいいか、彼女はまだ知らないのだ。そんな彼女を見ながら、涼は狼狽していた。が、その時。傍にいた少女が、イリサの方に近寄っていった。

「イリサちゃん？ その合図があったら、おトイレに行かなきゃダメですわよ。ほら、お洋服もお家も、汚れちゃうでしょう？」

「お……トイレ？」

初めて聞く単語に、イリサはまたも目を丸くしてキョトンとしていた。

「そう。お水が出る前におトイレに行って、そこにお水を出すんですよ」

「……イリサ、分からない……」

「あ、うん。その子に物を教える時はね、まだお手本が必要なんだ。でも……」

本来なら、自分がやって見せるべきなのだろう。しかし、流石にコレは……と、涼は躊躇した。だが次の瞬間、信じられない台詞が彼の耳に入って来た。

「涼さん、おトイレは何処ですか？」

「え？ ああ、そこのドアだけど」

「分かりましたわ。イリサちゃん、いらっしゃい。教えてあげますわ」

少女はイリサの手を引いて、トイレの方に向かった。そんな二人を見て、涼も思わずその後を追いかけてしまった。彼は少女を止めようと、反射的に動いていたのだ。だが……

「……り、涼さんは、ちょっとあちらに行行って頂けますか？ さ、流石に恥ずかしいですわ」

「ちょっと待って！ そこまでしてもらおう訳にはいかないよ」

「クス……涼さん、この子に『女の子』の事、教えられますの？」

「う……」

少女は先程の会話から、涼がイリサに対して『教えられないこと』がある事を見抜いていた。彼女は、ドアの前で濡れた下着を脱がせてから、イリサを連れてトイレに入っていった。そして暫くして、水の流れる音と共にドアが開き、二人が出て来た。イリサは『ふうん』という感じの表情で、一方の少女は俯いたまま、頬を真っ赤に染めながら。

「お兄ちゃん、分かったよ。あのイスに座って、お水を出せばいいんだね」

「そ、そうだよイリサ。それでいいんだ」

無邪気に、イリサは今覚えた事を涼に報告した。つまり少女は、実際にトイレで用を足す姿をイリサに見せて、やり方を教えてくれたのだ。

「……そ、その……ゴメン。さっきから、恥をかかせてばかりで」

涼の謝罪を聞きながら、少女は頬を染めたまま顔を上げ、彼の方にゆっくりと向き直った。

「気になさらないで。涼さんだけでは、教えられない事がある。それはとても、困る事なのでしょう？」

「そ、それは……そうなんだけど」

そこまでやってもらう義理は無いし、何より自分は今、彼女に恥をかかせた事を謝罪している立場なのだ。なのに何故？ と、涼は考え込んでしまった。が、それを問い質す前に、彼女は更に意外な台詞を発して涼を困惑させた。

「あの子に色々と教えるのを、私にも手伝わせて戴けますか？」

「え……っ？」

その返答に、涼は驚いて目を丸くした。だが目の前の少女は、ニコニコと微笑みながら彼の返事を待っていた。

「……お洋服の弁償は、それで無しって事に致しますわ」

「……！！」

その一言で、涼の心はグラリと揺れた。迷惑な話では無い、寧ろ嬉しい話である。だが彼としても、何故、出会って間もない彼女がここまで親身になってくれるのか。そこが理解できず、思わず問い質していた。

「その、どうして？ 知り合い方は最低っぽかったし、貴女にとってメリットは何も無いのに」

「……秘密です」

クスッと悪戯っぽく笑って、少女はますます涼を混乱させた。

「ま、まあ……そっちがそれで良いなら、俺は何も……ところで、そろそろ名前を教えてくれない？」

「あら、私としたことが。申し遅れました、二宮かなみと申します」

その名前を聞いて、涼の顔に驚きの色が浮かんだ。

「二宮、って……もしかして、公園の裏手にある、大きなお屋敷の！？」

「大きいかどうかは……公園のお隣というのは確かですけど」

涼が驚くのも無理からぬ事だった。彼女の家はとても個人邸宅には見えない、宮殿のような風貌を持った、かなり有名な屋敷だったのである。涼は、そんな所のお嬢様を裸にしちゃったのか……と、今更ながらに顔を蒼くした。

「ハァ……立ち居振る舞いや言葉遣いが、何か違うなーとは思ってたんだけどね。納得だよ」

「生まれ育った家が、たまたま少し裕福ただけですわ。私個人の力では無いですもの」

と言って、かなみは僅かに顔に影を落とした。どうも、金持ちの娘と言われるのは好きでは無いらしい。

「確かにね。じゃ、えーと……かなみさん、改めて宜しく」

マズった……というような、いかにもバツが悪そうな表情を一瞬見せたあと、涼はニコッと笑ってかなみに頭を下げている。

「こちらこそ……クスッ、偶然の悪戯に感謝ですわ」

(……俺、この子に会った事あるのかな？ 覚えが無いんだけどなあ)

かなみの、いかにも私は貴方を知っています……と云う感じの振舞いに少し戸惑った涼だったが、まあ、会った事があるならいざれ思い出すだろうと、強引に納得していた。そして彼は、何気なしにイリサの方に目をやって、彼女が下着を脱いだままだった……という事を思い出し、慌ててかなみに相談していた。

「かなみさん、イリサの下着が一組しかなくて、着替えが……あの、買いに行くの、付き合ってもらえるかな？ 俺が女兒用の

下着を買うのは、ちょっと厳しいんで」

「お安い御用ですわ。でも、その前に……この格好に合うボトムを、貸して頂けますか？」

「あ、メンズシャツにスカートじゃ、確かに合わないね。ゴメン。ジーンズでいい？」

「クス……」

涼は、男性用のボトムを着け、なおもニコニコと笑っているかなみを見て、彼女の底抜けの優しさは、一体何処から出て来るのだらうと思っていた。そして同時に、紘也は一体どうやってイリサの衣装一式を手に入れたのだらうと、彼の性格について改めて悩み始めていた。

かなみとの出会いから数週間経った、ある日曜の昼下がり。涼たちは水着を買うために、デパートを訪れていた。

「涼さん、良いですよ」

「んー、どれどれ？ ほお、似合うじゃないかイリサ」

「にあう……？」

「『かわいい』って事ですよ、イリサちゃん」

彼らは避暑のため、かなみの家で持っているプライベートビーチに招待されたのだ。が、イリサは勿論のこと、アルバイト三昧で遊ぶ余裕など無かった涼も、水着など持つてはいなかった。依って、こうして出向いてきたのである。

「でも、意外でしたわ。涼さんが、こんなにスナリとご招待を受けてくださるなんて」

「そ、そう？ まあ……イリサに色々な体験、させてやりたいしね」

涼はあれから、バイト漬けの毎日から『少しずつでもイリサと過ごす時間を増やそう』と、考え方を変えていた。生前の入沙を遊びに連れて行ってやる事などまず無かった彼を、このように改心させたのは、言うまでもなくかなみである。彼女は『生活のため』と躍起になるのもいいが、それだけで一度きりしかない『今』という時間を使い切ってしまうのもいいのですか？ と、彼を説得したのだ。以前の涼であれば、恐らくはその発言を否定していたに違いない。しかし、それを素直に受け止めたのは、やはり『入沙の死』と『イリサとの出会い』によって、彼自身の心に変化が現われた所為もあるだろう。

「しかし、イリサの造りの良さには、ホントに感心するよ。完全防水……っていうか、海水にも対応している上に、100メートルの水圧にも耐えるように作ってあるなんてなあ」

「高月紘也さん、でしたわよね。私が小学生の頃、自作ロボットの選手権大会で優勝なさった」

かなみは、小学生の頃に放映されたロボット選手権の全国大会を見ており、その時の優勝者——当時高校2年生だった紘也の事も覚えていたのである。だから、イリサを造ったのが彼であると知った時には、心底から驚いていた。

「俺も、その過去を知った時は驚いたよ。何しろ普段の姿からは、あの人がそんな優秀なエンジニアだなんて、信じられないもんなあ」

薄汚れた白衣に身を包み、フケだらけの髪と無精髭をほったらかしにして、風呂にもろくに入らない。そんなだらしの無い男が、イリサのような優秀なアンドロイドを造れるなどとはとても信じられる話では無いと、涼は思っていた。

「今度、高月さんにもお会いしたいですわ」

「ああ、彼はいつも大学にいるから、遊びに来るといいよ。事前に連絡くれれば、ちゃんと迎えに行くからさ」

『事前に』と念を押したのは、理由があった。普段の不潔極まりないままの紘也に会わせたりしたら、かなみが抱いている彼のイメージはガラガラと音を立てて瓦解してしまうだろう。それはあまりに可哀想だし、紘也も不憫だしな……と、彼なりに考えての事である。

「お兄ちゃん……このお洋服、いつものと違う……パンツにソックリ」

「パンツじゃないよ、イリサ。これは水着と違ってね、水の中で泳ぐ時に着るための服なんだ」

「かなみお姉ちゃんも、着る？」

「もちろんですわ。じゃあイリサちゃん、そのお洋服を脱いで、さっき着てきたお洋服に着替えますわよ」

涼の評価も上々だったので、いま選んだ水着で決定と判断したかなみが、イリサと一緒に更衣室の中に消えた。そして涼は、婦人用の水着売り場という、男が一人でウロウロしていたら浮いてしまう場所から早く離れたいたが為、更衣室のカーテン越しにかなみに話し掛けていた。

「かなみちゃん、俺、レジの近くに居るから。着替えが終わったらそこに来てね」

「分かりましたわ」

衣類フロアのレジ付近は紳士服売り場になっていたの、そこならば男が立っていてもおかしくは無い。涼はそそくさと、そこに向かって退避を始めた。

「ふう。イリサの水着選びでなければ、まず行かないような場所だよな。あー恥ずかしかった」

本音を漏らしながら、涼は紳士用の水着売り場に視線を移した。そして、自分の分も選んでおこうかと、物色を始めた。そんな彼に、背後から声を掛ける人物があった。

「よお、烏丸じゃないか。何だ？ お前でも泳いだりする事、あんのかよ」

その声を聞き、涼はあからさまに嫌そうな顔をして振り返った。然もありません。その声の主は、あの戸塚だったのだから。

「大きなお世話だ。俺が何をしようと、勝手だろ。放っとけよ」

「邪険にするなよ。なあ、こんなトコに居ねえで、ゲーセンでも行こうぜ。暇でしょうがねえんだよ」

「断る。生憎だが、今日は連れが居るんだ」

「連れ？ ……どこに？」

戸塚はキョロキョロと周りを見渡した。だが、それらしい人物は彼の視界には入ってこない。その一方で涼は、つい先日、完全に敵意を剥き出しにして接したのに、何故この男は、懲りずに俺に付き纏うんだ……と、疑念を抱かずにはいられなかった。

「涼さん、お待たせ……あら、お話し中でしたの？」

「ん？ ああ、気にしないでいいよ。さ、早く会計を済ませて次の店に行こう」

呼び声の方に向き直り、涼は先を促した。そしてチラリと戸塚の方を一瞥し、ぶっきらぼうに別れを告げた。

「そういう訳だ戸塚、じゃあな」

「何だ、女連れか？ 珍しい、雨でも降るんじゃないかねえか？ 傘持ってねえんだから、やめてくれよな」

「……大きなお世話だと、何度言わせるつもりだ」

涼の声に、段々と怒気が含まれていった。が、戸塚は『そんな雰囲気など何処吹く風』と言った感じで、かなみに目を向けた。そして彼は、彼女の顔をマジマジと見て……

「……ん？」

「な、何ですか？」

「ふうん……あ、いや失礼。何でもないよ」

「かなみちゃん！ そんな奴は放っというて、早く行こう」

かなみの前でも、涼は戸塚に対する不愉快さを全く隠そうとしなかった。こいつは自分に害を為す者だという事を、態度で彼女に伝える為だった。だがその時、かなみの背後からヒョイとイリサが顔を出した。そしてそれは当然、戸塚の視線にも入っていた。

「あれ？ その子、あの時の等身大フィギュアじゃねえか……何だ、生きてるのか！？」

目の前で動いているイリサを見て、戸塚は明らかに動揺していた。だが、そんな態度の変化になど注目せず、直前の台詞に対して怒りを露にした涼の左手が、彼の襟首を掴んでいた。

「……貴様、もう一度言ってみろ……誰が『フィギュア』だ？」

「あ、あ……ありえねえだろ！ 何でこの子が……生きて動いてるんだよ！？」

「誰も、そんな事は訊いちやいねえだろが。答えろ！ 誰が『フィギュア』だって！？」

完全にヒートアップした涼を、かなみがオロオロとした顔で見詰めた。彼女も、涼がこんなに怒りの感情を剥き出しにした所を見るのは初めてだったので、どうしていいか分からずにパニックになっていたのだ。しかし、その事態は意外な者による発言で沈静化された。

「お兄ちゃん……『らんぼう』はダメ……」

「い、イリサ……そうだな、悪かったよ」

そして涼は戸塚の襟首を離し、軽く突き放した。

「早く消えろ……俺の視界から消えるんだ。そして二度と出て来るな」

「わ、分かった……だが一つだけ教えてくれ、烏丸……あの子は一体？」

怯えた表情のまま、戸塚が質問して来た。だが涼は、そんな彼に冷たい視線を送りつつ、吐き捨てるように言い放った。

「あの子はイリサ、俺の妹だ。それ以外に何がある？」

「馬鹿な……あの子は死んだはずだろう？ 葬式だって……俺は夢でも見てるのか！？」

すっかりパニック状態となった戸塚を放置して、涼はかなみとイリサの二人を促し、その場を立ち去った。

「涼さん。あの人、誰なんですか？」

「大学で、同じゼミ取ってる奴だよ。どういう訳か、しょっちゅう俺に絡んで来るんだ。正直、嫌いなんだけどね」

「私も何か、あの人は嫌な雰囲気を感じますわ。それに、何故かしら……私の顔を見て何か頷いてましたわ。初対面なのに」

温厚を絵に描いたような彼女ですら、戸塚には嫌悪感を抱いているようだった。彼の放つ独特の雰囲気に対して態度を表面に出さなかったのは、未だ人格形成の途上にあるイリサだけだった。

「お兄ちゃん、『らんぼう』はダメなのよ？」

「うん、そうだな。悪かった。お兄ちゃん、もう『らんぼう』しないよ」

心の中で『お前の前ではな』と付け加え、涼はその場を收拾した。イリサの純粋な目に見据えられると、怒り心頭となった彼も毒気を抜かれてしまうようである。しかし同時に、イリサに害を為す者は絶対に許さない……そう考えていたのだった。

※体験版はここまでで終了です。続きは正規版にてお楽しみください。